世界の文学

25

ロブ＝グリエ
ビュトール

集英社版 世界の文学 25

ロブ＝グリエ

嫉妬

白井浩司＝訳

集英社

LA JALOUSIE
by Alain Robbe-Grillet
Copyright © 1957 Les Éditions de Minuit
LE DEGRÉS
by Michel Butor
Copyright © 1960 Éditions Gallimard
Japanese translation rights through the Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

© 1977 Shueisha

集英社版世界の文学25
ロブ＝グリエ／ビュトール
一九七七年 九 月二〇日印刷
一九七七年一〇月二〇日発行
訳 者 白井浩司／中島昭和
編 集 株式会社綜合社
一〇一 東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話 (〇三) 二三九―三八一一
発行者 堀内末男
発行所 株式会社集英社
一〇一 東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
電話 出版部 (〇三) 二三〇―六三六一
販売部 (〇三) 二三〇―六一七一
印刷所 中央精版印刷株式会社
大日本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価は帯に表示されています
0397-122025-3041

目次

ロブ＝グリエ

嫉妬　白井浩司訳　3

いま、柱の影が……　5
いま、南西の柱の影が……　13
とかされた髪に沿って……　24
谷間の底で……　29
いま、二番目の運転手の声が……　37
いま、家は空だ……　44
家中が空っぽだ……　52
剝げ残った灰いろのペンキと……　65
いま、柱の影が……　74

ビュトール

段階　中島昭和訳　79

第Ⅰ部　81

第Ⅱ部 181
第Ⅲ部 329
解説 白井浩司／中島昭和 423
著作年表 437

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

嫉

妬

いま、屋根の南西部の角を支えている柱の影が、露台（テラス）の同位角を二つの等しい部分に分けている。この露台は屋根のある広い廻廊（かいろう）で、家を三方からとり囲んでいる。中央の部分も両翼も広さは変らないので、柱によってつくられる影の線は、正確に、家の角に達している。だが影は、それ以上に伸びない。太陽はまだ空高く、露台の敷石だけを照しているからだ。家の木の壁、つまり正面および西翼の切妻は、まだ屋根によって光線がさえぎられている（この屋根は、いわゆる母屋と露台とに共通のものなのだ）。それでいま、屋根の末端の縁の影は、母屋の角の鉛直の二面と露台とがつくりだしている直角の線に、正確に一致している。

いま、Aは、中央の廊下に面した内扉から寝室にはいった。彼女はいっぱいに開かれた窓の方を見ない。その窓を通して、扉を開けたときから、露台のあの隅を見ることができるだろう。彼女はいま、扉の方をふり向いてそれを閉める。彼女は、相変らず明るい色のドレスを着ている。昼食のときに着ていた、とても身体（からだ）にぴったりとしている立襟のドレスだ。クリスチアーヌは一度ならずAに、身体にぴったりあわない服の方が暑さをしのぎやすいことを思いださせた。だがAは、笑ってとりあわなかった。暑さに苦労したことがないのだ。たとえばアフリカなどで、もっとずっと暑い気候を体験したけれども、たいへん元気にやっていけたのである。暑さもそうだが寒さにも平気で、どこに行っても気楽に暮せるのだ。彼女がふり向くと、黒い髪の巻毛がしなやかに、両肩や背にふりかかる。

手すりの支えとなっているふとい横木の上には、もうほとんどペンキが残っていない。木の薄よごれた部分が露（あら）われ、小さな割れ目の線が縦に走っている。この横木の向う側、露台の二メートルあまり下から庭がはじまっている。

寝室の奥から眺めやると、視線は、手すりを越え、はるか彼方、小さな谷間と向かい合った山腹の上で、ようやく栽培場のバナナの樹の間に着陸する。みどりの大きな葉が密生した羽飾りのようなものの間には、土を見つけることはできない。しかしこの地区の栽培がはじまったのは、かなり最近のことなので、植込みの苗の線が規則正しく交錯している有様を、まだはっきりと辿（たど）ることができる。払下げ地の、眼に見える部分のほとんど全体にわたって事柄は同じである。なぜなら、もっとも古い小農地――そこはいま、無秩序が支配しているが――は、もっと上流の、あの谷の斜面、つまり家の向う側にあるからだ。

同じく向う側に国道が通っている。国道は高原の縁より
も少しばかり低い。それだけが払下げ地に通じており、そ
こが払下げ地の北端にあたる。国道から、自動車の通れる
一本の道が倉庫の列に達し、そこからさらに下って家に達
する。家の前には障害物のないゆるやかな傾斜をした、広
い空間があって、車を自由に操作することができる。
家は、前方の広場と同一平面に建てられていて、家と広
場との間にはヴェランダもなければ廻廊もない。ここ以外
の三方は、逆に露台で取り囲まれている。
土地の傾斜は、広場から急に目立っているが、その結果、
(南側の正面を縁どっている)露台の中央部分は庭よりも
少なくとも二メートルは高い。
庭の周囲には、バナナの樹のみどりの塊が拡がり、栽培
場の境界にまで達している。
家の右手も左手もバナナの樹が近くまで迫り、露台その
ものが比較的低いので、露台に立っても遠くまで視線がお
よばず、樹々の配置を見分けることができない。だが、谷
間の奥の、五点形の植えつけは、すぐに眼にはいる。それ
で、ごく最近、植替えの行われたある小農地——赤みがか
った土地が、まさに葉の繁みに場所をゆずりはじめている
ところ——で、若い幹が一列に並び、交錯しつつ四方に規
則的に伸びているさまを、ここからは楽々と眺めることさ
えできる。
真向いの斜面の小農地は、若芽がかなり伸びているが、
観察することはもっとずっとやさしい。じっさいそこは、
もっとも都合よく眼にうつる場所であり、監視の必要など
ほとんどないところだといえる(もっとも、そこまで行く
にはかなりの道のりを要するが)。寝室の開け放たれた二
つの窓のいずれからも、特に意識しないで視線は自然にそ
の場所に向けられるのだ。
いましがた閉めたばかりの内扉によりかかってAは、見
るとはなしに、手すりの剝げた木部を眺めている。それか
ら彼女の視線は、もっと近くの窓の同じく剝げた支柱に移
り、さらにもっと近くの、床の洗われた木に移る。
彼女は寝室の中に二、三歩進み、大きな箪笥に近づいて、
その最上段の引出しをあける。それから、引出しの右側に
はいっている紙片を動かし、その上に身をかがめる。底を
もっとよく調べようとして引出しをもう少し手前にひく。
改めて調べ直すと上体を起し、肱を身体につけてじっとし
ている。折り曲げた左右の前腕は、上体に隠されているが、
疑いもなく一枚の紙片を両手に持っているのだ。
眼を疲れさせずに読みつづけようとして、いま彼女は、
光の方に向きを変える。傾けた横顔はもう動かない。紙片
は、たいへん薄い青いろをしていて、普通の便箋の大きさ
である。四つ折りにしたらしい跡がそこにはっきりとつい
ている。
Aは、それから、手紙を手にしたまま引出しを押しもど
し、小さな仕事机の方に進んで行く(仕事机は、二番目の

窓近く、廊下と寝室を隔てる仕切りにぴったりとくっつけて置かれている)。彼女は紙ばさみの前にすぐに坐ると同時に、そこから薄い青いろの紙片を一枚ぬきとる。最初の紙片と同一のものであるが、ただなにも書かれていない。万年筆のキャップをはずし、ちらりと右手に視線を投げる(だが、壁のくぼみはずっと後方にあるので、そのまん中にも視線は達しない)。それから紙ばさみの方に頭を傾げて、書きはじめる。

黒い、輝いている巻毛が背中の中央で動かない。ドレスの金属の狭いチャックが、もう少し下のところで背骨のありかを示している。

いま、屋根の南西部の角を支えている柱の影が、露台の中央部分を横切って、敷石の上に伸びている。家の正面の前方には、夕べの憩いのための肱掛椅子がならべられた。すでに影の線の先端は、家の正面のまん中にある入口の扉に、ほとんど達している。家の西翼の切妻では、太陽はほぼ一メートル半の高さの木部を照している。この側につけられた第三の窓から、万一、ブラインドがおろされていなかったならば、陽が寝室いっぱいに射し込んできたことであろう。

露台のあの西翼のもう一方の端は、台所に通じている。半ば開いた台所の扉から、Aの声が聞えてくる。つづいて、歌うようなよくしゃべる黒人の料理人の声、それからふたたび、控え目だがてきぱきとした声が、夕食の支度を命じている。

太陽は、高原のいちばん突きでた先にある、突起した岩の背後に、姿を消した。

Aは、この地方でつくられる肱掛椅子のひとつに谷間の方を向いて腰を下ろし、昨夜借りた小説を読んでいる。昼食の際に、彼らはすでにその小説について語り合った。彼女は、暗くてよく見えなくなるまで、眼を離さずに読みつづける。それから、顔をあげ、書物を閉じ、その本を低いテーブルの上の手近に置き、正面をじっと見つめる。格子の手すりや、もう一方の斜面のバナナの樹は、やがて夕闇のなかに見えなくなる。彼女は、いたるところからたちのぼる、くぼ地にむらがった無数のこおろぎの鳴声に耳を傾けているようだ。しかしその声は、耳をろうするばかりの、なんの変化もない連続的な音であって、聞くといったものではない。

夕食のために、フランクはもうそこにいる。相変らず微笑をうかべ、おしゃべり好きで、愛想のいい顔をして。こんどは、クリスチアーヌをつれてこなかった。子どもに少し熱があるので家に残っているのだ。このごろでは、彼がクリスチアーヌをつれずにやってくるのも、珍しくはない。それは子どもが原因であり、またクリスチアーヌ自身のさまざまな障碍のせいもあった。彼女の健康は、ここの暑くて湿った風土にうまく適応しないのだ。第三に、人数が多すぎ、監督のゆきとどかない使用人たちがもたらす家政上

の気苦労も外出のできない理由だった。

しかし今夜、Aはクリスチアーヌを待っているように見えた。ともかく彼女は、四人分の食器を並べさせておいた。彼女は、使用されない食器をただちに片付けるように命じる。

フランクは、露台の上の低い肱掛椅子のひとつに深々と腰を下ろし、その坐り心地のよさについての——以来ロぐせになった——感嘆のことばをもらす。肱掛椅子は木製で皮革帯のついた簡素なもので、Aの指示にもとづいて原住民の職人がつくったのだ。彼女はフランクの方に身をかがめて、グラスをさしだす。

いますっかり暗くなったのに、彼女はランプを持ってこないようにいった。ランプは蚊を呼び寄せるというのが彼女の言い分だ。グラスには、ほとんど溢れるばかりに、コニャックと炭酸水が注がれ、立方形の氷が浮いている。完全な暗闇の中で、下手に身体を動かしてグラスの中身をこぼすといけないから、彼女は、フランクのためのグラスを右手で注意深く握り、彼が坐っている肱掛椅子にできるだけ近づいた。彼女はもう一方の手を椅子の肱にのせ、ほとんど頭と頭とがふれ合うほど、彼の方に身をかがめる。彼はなにごとかを囁く。おそらく、感謝のことばだろう。

柔らかな身のこなしで上体を起すと、彼女は三番目のグラスをとり——こんどは、前ほど一杯ではないから、こぼすおそれはない——フランクの隣に腰を下ろしに行く。その間、フランクは、ここに着いて以来はじめたトラックの故障についての話をつづけている。

今夕、露台に肱掛椅子を運ばせたとき、椅子の配置を決めたのは、彼女自身だった。フランクのものと指定された椅子と、彼女の椅子とは、事務室の窓の下——もちろん、母屋の壁とすれすれに——隣り合せに置かれている。フランクの椅子は彼女の椅子の左手にあり、右手の少し前寄りには、酒壜が置かれている小テーブルがある。残りの二つの椅子は、先の二つの椅子と露台の手すりとの間の眺望を損わないように、このテーブルの向う側の、さらに右寄りに並べられた。同じく〈眺望〉の理由から、これら残りの二つの椅子は、他の椅子の方に向けられてはいない。それらは、格子の手すりと谷間の上流とを、斜めから見るように置かれている。この配置のために、それらの椅子に坐る人たちは、Aを——特に、いちばん遠くの四番目の椅子から——見ようとする場合、首をひどく廻さなくてはならない。

三番目の椅子は、金属のチューブに布を張った折畳椅子だが、それは四番目の椅子とテーブルとにはさまれて、明らかにうしろにずらせてある。しかし、このあまり安楽でない椅子は、空いたままだ。

フランクの声は、彼自身の栽培場に関する一日の苦労を語りつづけている。Aはその話に興味を抱いているように見える。時折、彼女は、自分の関心を証明する二、三のことばで、彼をはげます。沈黙の合間に、小テーブルの上に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

グラスを置く音が聞える。
手すりの向う側、谷間の上流の方には、ただ、こおろぎの声と、星ひとつない夜の暗さがあるにすぎない。
食堂には、二つの石油ランプが輝いている。ひとつは細長い食器戸棚の左端に、もうひとつは食卓の上の、四番目の客の空席の場所に置かれている。
食卓は、継足し板が（これほど小人数では不必要だから）使われていないので、正方形をしている。三組の食器が三方を占め、ランプが四番目を占めている。Aは、いつもの席に坐り、フランクは彼女の右手に――したがって食器戸棚の前に坐る。
食器戸棚の上には、二番目のランプの左側に（つまり、台所に向かって開かれた扉の側に）、食事の際に使われる清潔な食器類が重ねられている。ランプの右うしろには、壁にくっついて、この地方特産の素焼の壺が置かれ、そこが戸棚の中央である。さらに右寄りには、壁の灰いろの塗装の上に、男の頭の、輪郭のぼやけた大きな影が映っている。フランクの頭だ。彼は上着も着ずネクタイもつけていない。ワイシャツの襟は、ボタンをはずして大きく開かれている。しかしそのワイシャツは、上質の細い繊維でつくられた、非のうちどころのない白色で、折返しの袖口は、象牙のカフスボタンでとめられている。
Aは、昼食のときと同じ服装だ。フランクは、クリスチアーヌがAの服装を、「この地方では暑苦しすぎる」と批評したとき、ほとんど妻と口論せんばかりだった。だがAは、笑ってとりあわなかった。「それに、ここの気候はそれほど我慢できないってほどじゃありませんわ」と、彼女はその問題にけりをつけようとしていった。「カンダで、一年のうち十カ月の間、どんなに暑いかを御存知でしたらね！……」そこで、しばらく会話はアフリカのことに限られた。
台所の開いた扉から、ボーイが両手にポタージュでいっぱいのスープ鉢を持ってはいってくる。ボーイがそれを分け終ると、Aはすぐに、食卓の上にあるランプをどけさせる。光がまぶしすぎて眼が痛くなる、というのだ。ボーイはランプの把手を持って、Aが左手をのばして指示した、部屋の反対の端の家具の上へ持って行く。
こうして、食卓は薄闇のなかに沈む。主な光源は、食器戸棚の上に置かれたランプだけだ。二番目のランプは、反対の方向に移されたので、いまでは、あまりに遠すぎるのである。
台所側の壁の上のフランクの頭の影は消えた。彼の白いワイシャツは、ついいましがたのように、もはやどぎつい照明の下で光り輝くことはない。ただ右手の袖だけは、背後から四分の三ほど、光に照されている。肩と腕が、明るい線で縁どられ、さらに上方の、耳や首もやはりそうなっている。顔はほとんど逆光線の位置にある。
「この方がおよろしくなくて」と、Aは彼の方を向きなが

らたずねる。
「ずっとうちとけますね」と、フランクは答える。
彼は素早くポタージュを飲み込む。別に大げさな仕種をするわけでもなく、礼儀正しい手つきでスプーンを握り、音もたてずに液体を流し込むのであるが、彼はそうしたなんでもない仕種を、馬鹿らしいほど熱心に力をこめてやっているように見える。どこがそうだとはっきりいうことはできないが、あきらかに彼は、なにか、いちばん大事な規則を無視し、ある特別の点では慎みに欠けているのだ。
いちじるしい欠点がすべて避けられていても、彼の振舞はやはり人目につかずにはおられない。いや、かえって逆に彼の振舞は、Aが、いましがた彼と同じ動作をし終えたことを、証明せざるをえない。彼女は、動いたような素振りも見せず、——しかも、異常なほどに身体を動かさないことで、人の注意をひくこともなかった。彼女もやはりポタージュを飲んだことは、空になった、しかし汚れているその皿をちらりと見ればすぐにわかることだ。
それに、記憶をたどって、彼女の右手や唇のいくらかの動き、皿と口との間のスプーンの行き来などを思い返せば、そういうことに意味があったと気付かれよう。
さらに確証が必要なら、料理人がポタージュに塩をきかせすぎはしなかったかと、彼女にたずねればいい。
「そんなことないわ」と、彼女は答える。「汗をかかないようにするには、塩を食べるべきですもの」
よく考えてみれば、この答はなにも、彼女が今日、ポタージュを味わったということを絶対に立証することにはならない。
いま、ボーイは皿を片付ける。こうして、Aの皿の汚れの跡を——あるいは、彼女がポタージュを飲まなかったのなら、それらの跡がなかったことを——二度と確かめることが不可能になる。
会話はふたたび故障したトラックの話にもどった。フランクはもうこれからは、中古の軍需品を購入しないだろう。最近買ったものが、ずい分苦労の種になったからだ。こんど車を一台とり代える場合には、新車にしよう。
しかし、新型のトラックを黒人の運転手に任せるのは考えものだ。黒人だって、白人と同じくらい早く、あるいは白人以上に、車をだめにしてしまうだろう。
「それにしても」と、フランクはいう。「モーターが新しければ、運転手はそれにさわるにはおよびませんからね」
ところが、事実はそれと正反対であることを知る必要があろう。新しいモーターは、新しいだけに、いっそう心をそそる玩具になろうし、それに、悪い道路の上でスピードを出しすぎたり、ハンドルで軽業をやってみたりしたら……。
三年間の経験から、フランクは黒人の間にも、慎重な運転手がいると考えている。Aも、もちろん、同じ意見だ。
彼女は、機械の強さの比較に関する議論の間は、ことばを控えているが、運転手の問題になると、かなり長い、し

かも断定的な発言を行う。
もっとも、彼女のいうことは正しいかもしれない。こういう場合、フランクの言い分もやはり正しいことになるにちがいない。
二人はいま、Aが読んでいる小説のことを話し合っている。小説の舞台となるのはアフリカである。女主人公は(クリスチアーヌのように)、熱帯の風土に耐えられない。暑さのために、彼女は本当に発作を起しさえするのだ。
「ああいったことは、なによりも気のせいですよ」と、フランクはいう。
つづいて彼は、その本をひもといたことがない者にはほとんど理解できない、夫の行動をほのめかす。彼のことばは、「それを掴まえる」、あるいは「それを学ぶ」ことができるといった文句で終るが、誰のことか、それともなんのことか、はっきり断定することができない。フランクはAを見つめ、Aもフランクを見つめている。彼女は彼に素早い微笑を投げかけるが、それはすぐに薄闇の中に吸い込まれてしまう。彼女は物語を知っているから、フランクのいったことがわかったのだ。
いや、彼女の表情は動かなかった。ずいぶん前から微動だにしなかった。唇はさきほど話し終えてから、固く結ばれたままだった。束の間の微笑と見えたものは、ランプの反映か、蝶の影だったにちがいない。
それに、そのとき、彼女はもうフランクの方を向いていなかった。彼女は、顔を食卓の軸にもどしたところであり、正面のなにも掛かっていない壁の方をまっすぐに見つめていた。壁には、先週、つまり月はじめか、それとも先月、あるいはそれより後に潰された百足の跡が、黒いしみとなって残っている。
フランクの顔は、ほとんど逆光線の中にあるので、なんの表情も示していない。
ボーイが皿を片付けにはいってくる。Aはいつものように、露台にコーヒーをだすことを命じる。
露台は、完全に真っ暗だ。もう誰も口をきかない。こおろぎの声もとだえた。そこかしこから、夜の肉食獣の微かな叫び、こがね虫の鈍い羽音、低いテーブルの上に陶器の小さな茶碗を置く音だけが聞える。
フランクとAは、家の木の壁に背を向けている、二つの同じ肱掛椅子に坐った。金属のチューブでできた椅子は、依然空席のままだ。四番目の椅子の位置は、谷間を眺めることができないいまとなっては、なおさら理屈にあわない(夕食前の短いたそがれの間でも、手すりの格子があまり狭すぎるので、景色を十分に眺められなかった。それに、視線は、支えの横木越しに、空に出会うだけだった)。
手すりの木は、指を木目や縦の小さな割れ目にそってすべらせるとき、なめらかな感触を与える。つぎにぎざぎざの木肌があり、それからふたたび、平らな表面が現われるが、こんどは筋がまったくない代りに、ところどころペン

キが薄く剝げた、でこぼこの部分が点在している。
昼間だと、二種類の灰いろ、裸木の灰いろと、もう少し明るい剝げ残っているペンキの灰いろとの対照は、ほとんどのこぎりの歯のようにでこぼこの輪郭を持った、複雑な図形を描きだす。支えの横木の上には、ペンキの最後の残りでできている突起した小島がところどころにあるだけだ。ところが、手すりの上のペンキの剝げた部分は、もっとずっとわずかで、だいたい、高さの半分ほどのところにあり、それがくぼんだ汚点をつくっている。指でそこをさわると、木部の垂直のひび割れが感じられる。板の端の部分では、新しいペンキのうろこが、剝がれやすくなっている。剝がれた縁の下に爪を押し込んで、指骨を曲げてこじあければいいのだ。ほとんど抵抗は感じられない。

向う側に、闇に馴れた眼は、いま家の壁から明るい形が浮きだすのを認める。フランクの白いシャツだ。彼の前腕は両方とも、水平に肱掛の上に置かれている。上半身は、椅子の背にもたれて、うしろに傾いている。
Aはダンス曲を口ずさむ。歌詞はほとんど理解できない。だがフランクにはわかるかもしれない。おそらくはAと一緒にしばしば聞いていて、もう知っているとすればだ。もしかすると、彼の好きなレコードのひとつかもしれない。
Aの両腕は、服地の青白い色合いのために、隣の男の腕ほどはっきりしてはいないが、同じように肱掛の上に置かれている。四本の手は、一列に並んで動かない。Aの左手とフランクの右手の間隔は、ほぼ十センチだ。夜の肉食獣のかすかな叫びが、鋭くかつ短く、谷間の奥のどこかで、ふたたび鳴りひびく。
「そろそろおいとましましょう」と、フランクがいう。
「いいじゃありませんか」とすぐにAが答える。「ちっともおそくありませんよ。ここにいると、とても気持がいいわ」
ほんとうに帰りたかったら、フランクにはもっともな理由があるはずだ。家には妻と子どもしかいないからである。しかし彼は、ただ翌朝早起きをしなければならないというだけで、クリスチアーヌのことにはまったくふれない。前と同じ鋭く短い叫び声が、しだいに近づいてきて、いまでは東側翼の露台のすぐ下の庭から聞えてくるように思われる。
同じ叫びが、こだまのように、反対の方向からそれにつづく。国道の上の方から、他の叫びがそれに答える。さらに他の叫びが、くぼ地の方から聞える。
時折、その叫び声は、もっと低くなったり、あるいは長くなったりする。おそらくいろんな種類の獣がいるのだろう。だが、叫び声はすべて似かよっている。それらが容易にそれとわかる共通の性格を持っているのではなく、むしろ、それには性格の共通の欠如があるというべきだろう。それらは獰猛(どうもう)な、あるいは苦痛の、あるいは強迫的な、あ

るいはまた愛の、叫び声のようには聞きとれない。いわば、はっきりした理由もなく発せられた、機械的な叫び声のようなもので、なんの意味も表わさず、ただ、夜の旅路の標尺となるべき、それぞれの動物の存在や、位置や相互の移動を示しているにすぎないのだ。

「とにかく」と、フランクはいう。「おいとましましょう」

Aは答えない。二人はともに身動きしない。二人は隣り合って坐り、上半身を肱掛椅子の背にもたせてうしろに傾け、両腕を肱掛の上に並べている。彼らの四本の手は、同じ位置の同じ高さで、家の壁に平行して一列に並んでいる。

いま、寝室側の露台の角にある、南西部の柱の影が、庭の土の上にまで伸びている。太陽は東天にまだ低く、日光はほとんど斜めに谷間に射している。谷間の軸に対して斜めに並んだバナナの樹の列は、この照明を受けて、いたるところではっきりと姿を現わす。

家が建てられている側面と反対側の側面上の植込みの苗は、低部から最上部の最高の境界線まで、かなり容易に数を数えることができる。とりわけ家の正面は、その地点に位する小農地の年齢が若いので、計算は容易である。

不況のために、ここでは大部分の土地が開墾された。現在ではもはや、高原の縁に、約三十メートル幅の未開墾地が残っているにすぎない。その高原は、突起も裂け目もない円い岩によって、谷間の側面と連結している。

未開墾地帯とバナナ園との境界線は、完全に直線ではない。それは、交互にひっこんだり、とびだしたりする角度を持った波線である。その波線のそれぞれの頂点は、時代を異にするが、ほとんど同じ方角を向いた、別々の小農地に属している。

家の真正面の樹々の繁みは、この地区での最高の耕作地点を示している。そこでどんづまりとなっている区画は長方形である。大地は、みどりの葉の羽飾りにかくれてもはや見えないか、あるいはほとんど見えない。しかし、根元の少しの狂いもない直線は、それが最近栽培されたばかりで、まだひと房も収穫がなかったことを示している。

この区画の上流の部分は、樹木の繁みからはじまり、最大の傾斜を（左方に向かって）わずかに逸れながら下降する。そこには、小農地の下の境界線まで、三十二本のバナナの樹が一列に並んでいる。

バナナの配列を同じままに、この小農地を下に延長すると、もうひとつの区画が、最初の区画と、その底辺を流れている小川との間の空間全部を占めている。この区画は、その頂点に、わずか二十三本の苗しか持っていない。ただし、それらはずっと生長していて、前述の苗とは見分けがつく。幹の丈も少し高く、葉並は錯綜し、よく実った数多くの房がついている。それに、すでにいく房かは切り取られている。だが、根元から幹を切り倒したあとの空席は、薄いみどりいろの大きな葉の羽飾りをつけ、果実をぶらさ

げてしなった太い枝を伸ばしている苗そのものと同じくらい、容易に見分けがつく。

その上この小農地は、上にあるもののように長方形をしていず、梯形である。なぜなら、底辺を形づくる川岸は、互いに平行しているその両側——上流と下流——に対して、垂直ではないからである。右側（つまり下流）には、バナナの樹は二十三本ではなく、十三本でしかない。

最後に、底辺は、小川が直線をなしていないので、直線ではない。この区画は、横の中央部あたりで、あまり目だたないふくらみによってせばめられている。したがって列の中線には、真の梯形だったら十八本の苗があるべきなのに、十六本しかない。

最左端から数えて二列目には（五点形の植えつけの配置からいって）、長方形の区画の場合には二十二本の苗があるはずである。また、正確に梯形の土地であっても、二十二本のはずである。というのは、底辺がほんの少しちぢまっても、ほとんど感知できないだろうからだ。そして、事実、そこには二十二本の苗がある。

しかし三列目は、やはり長方形だったら二十三本あるべきだろうが、二十二本しかない。ここまでだと、川岸の彎曲によっても、なんら補足的な差異は生じない。四列目についても同様のことがいえる。つまり、仮定の長方形の偶数目の線よりも、一本だけ少ない二十一本となっている。

川岸の彎曲は、五列目から作用を開始する。それでこの列は、ほんとうの梯形の場合なら二十二本、長方形の場合なら（奇数目の線なので）二十三本あるべきところ、じっさいには二十一本しかない。

この数字自体は理論上のものである。というのは、いくらかのバナナの樹は、房が熟して、すでに地面から切り取られているからだ。それでじっさいに四列目を構成しているのは、十九本の葉の羽飾りと、二本分の空席である。そして五列目は、二十本の羽飾りと一本分の空席——つまり、下から上へ向かって、八本の葉の羽飾り、一本分の空席、それから十二本の葉の羽飾りといった具合だ。

じっさいに目撃できるバナナの樹と、切り取られたバナナの樹との配列に留意しなければ、六列目はつぎのごとき数字を示すだろう。二十二本、二十一本、二十本、十九本——この数字はそれぞれ、長方形、真の梯形、底辺の彎曲した梯形、最後に、収穫により切り取られた幹を引いたあとの梯形を表わすものである。

以下の列はつぎのごとき数字となる。二十三本、二十一本、二十一本、二十一本。二十二本、二十一本、二十本、二十本。二十三本、二十一本、二十本、十九本、等々……。

この区画の下流の境界線となる小川にかかった丸木橋の上に、一人の男がうずくまっている。青いろのズボンと、肩をむきだしにした、無地の袖なしメリヤスシャツを着た原住民だ。彼は水面にかがみこんで、底のなにかを見ようとしているようだ。しかし、水量は非常に少ないにしても、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.